

* これは実際の試験問題ではありません。
(This is NOT the actual test.)

No.000001

受験番号				
------	--	--	--	--

学習能力考査

社 会 科 学

資料及び問題

指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

0. ICUに合格したら入学しましょう。(笑)
1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に41の問い(1-41)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があつてから正味70分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて70分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書き入れないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があつたらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

「話を聞かない男、地図が読めない女」という本が、2年前、日本語に翻訳され出版されて以来、よく売れているらしい。一般的に言って、本の売れ行きというのは、読者が固定している作家の著作でない限り、タイトルの魅力や装丁の美しさ、あるいは手軽さなどという要因に左右されると考えられる。この本の場合、売れている最大の理由は、タイトルが多くの人のお身にまつまされるからではないだろうか。

この本の著者であるアラン・ピースおよびバーバラ・ピースによれば、女性が地図を読むことを不得手とするのは、空間能力の問題によるという。空間能力とは、「対象物の形や大きさ、空間に占める割合、動き、配置などを思いうかべる」能力のことを指す。そして、男性は、狩猟者であった太古の昔から、この能力に磨きをかけた結果、右脳の前の方に空間能力の拠点を発達させることができたのに対し、女性は脳に空間能力を操る部分をはっきりともつことができないでいる。このことにより、男性は、地図を読むことが女性より得意なだけでなく、現代の「狩り」としてのゴルフ、コンピュータゲーム、フットボールなどに興味を持つのだそうだ。一方、空間能力の劣った女性は、地図を読むことは不得手で、どうしても読まなくてはならないときには、地図を進行方向にあわせてくるくるまわしたりし、しばしば物笑いの種になったりしている。

第二次世界大戦後、世界のフェミニストたちは、男性と女性との違いは、オス・メスといった生物学的違いではなく、環境、家庭でのしつけ、教育などによりつくられたものである、と主張してきた。いいかえれば、男性と女性の違いは—妊娠、出産といった生殖に関する違いをのぞき—後天的に作り上げられたものなのである。この論理により、フェミニストたちは、男性と女性の違いを、性あるいはセックスとよばずに、ジェンダーということばであらわし、世界各地でジェンダーを根拠とした女性差別解消を求め、政治活動をしてきた。

しかし、である。こういった現代の女性解放運動あるいは、男女平等化のながれの基礎をつくったジェンダーの考え方に逆らう形で、前出のような男女の「生物学的違い」を謳う本が、売れに売れている。

男女の脳の構造の話にもどろう。男性の脳は、右脳にある空間能力の拠点が発達しているとアランとバーバラ・ピースはいつている。右脳は、現実的で論理的な左脳にくらべ、芸術的で空想的な能力をつかさどるところである。しかし男性は女性に比べ理屈っぽいと著者たちはいう。なぜか。男性の脳の空間能力をつかさどる拠点は発達していても、右脳全体は、発達していないのか。脳生理学の専門家、大島清によれば、男女の脳差には、左右の脳の違いによるものと、上下の脳の違いによるものがあるという。男性の脳は、脳の表面を覆う大脳新皮質を満足させようとするのに対し、女性は、その下部にある大脳辺縁系が満足しなければ、本当の満足を得た気がしない。そして、新皮質と辺縁系の違いは、「理性」と「本能」あるいは、「論理」と「感情」の違いなのだそうである。

大島は、男性の脳は新皮質が優位性をもつことで、論理的であり知的であるといっている。さらに大島は、この優位性が男性特有の暴力とも結びついている、ともいうのである。人類史上、妻への暴力、レイプ、いじめ、といった個人的な暴力から、人種差別、民族浄化、国家の力を背景とした大量殺戮といったものまで、主だった暴力の主役はたいてい男性だった。その暴力性を説明するのに、大島はこう言っている。

男脳はこの命令系統が新皮質→辺縁系となっている。知性と理性の脳がひとたび怒りを爆発させれば、辺縁系の持つ安全弁が破壊されて、想像を絶する攻撃性が生まれてくる。

さて、この男性と女性の生物学的違い、あるいは脳の構造の違いを中心にすえた国際関係論があることをご存知だろうか。1998 年秋、アメリカの国際政治経済誌『フォーリン・アフェアーズ』は、巻頭論文として「もし女性が世界政治を支配すれば」というフランシス・フクヤマの論文を掲載した。当該論文は、実際には「女性と世界政治の発展」という地味なタイトルがついていたのだが、表紙に赤字でかかれたセンセーショナルなタイトルと、これに輪をかけた挑発的な内容で、たちまち国際政治の専門家たちの話題の中心となった。

この論文におけるフクヤマの主張は、次の通りである。男性は女性に比べ、明らかに攻撃的である。これは、人間にもっとも近いチンパンジーをみれば明らかである。たしかに、人類の歴史には、洋の東西をとわず、マーガレット・サッチャーや、インディラ・ガンディー、ゴルダ・メシアのような「おとこらしい」女性指導者達が幾多となく出現している。またジーン・エルシュタインが指摘したように、国を守る「正義の味方」としての男性と、それを待つ「美しき魂」としての女性という役回りを飛び越えて、戦争に陶醉し荷担する女性と、戦争の酷さを嫌悪する男性がいることもまた事実である。しかし、「統計的にみれば、攻撃という経験を楽しむのは男性である」とフクヤマは続ける。したがって、女性が支配する世界は、現実よりはるかに平和で安全になるはずなのである。

ここで止めておけば、フクヤマの論文は、女性の優越性を主張する一部のフェミニスト達の主張とさしてかわらなく、さしたる論争も巻き起こさなかったに違いない。ところが、フクヤマの論文は、男性の攻撃性をみとめ、女性による支配が平和をもたらすことを確認した上で、議論の核心にはいるのである。彼はまず、アメリカ合衆国を中心とした先進民主主義国すべてにおいて、女性が参政権をもって以来、女性の政治参加が進んできたことを指摘する。そして、世界がこのような国ばかりならば、国家間の問題は平和裏に解決されるだろうが、広いこの世界には、依然として「モブツ」や「ミロシェビッチ」、「サダム」にひきいられる国が、折あらば現れるであろう。そして、これらの指導者たちが化学・生物兵器や核などの大量破壊兵器により武装するかぎり、私たちは男らしいリーダーを必要

としているのである、と述べている。さらに続けて具体的政策提言として、アメリカ合衆国においてすすめられている、軍隊への女性参加の究極の形としての男女混合戦闘部隊は、伝統的な男性同士の「仲間意識」を男性から奪い、さらに男性同士が女性をめぐる争うことから、兵士の士気低下を招き軍隊の任務遂行能力の減退につながるとして、軍隊における男女の棲みわけを提案している。

フクヤマの論文は、あんのじょう多くの研究者やジャーナリストからの批判を招いた。よほど反響が大きかったからか、『フォーリン・アフェアーズ』誌は、1999年1・2月号にフクヤマ論文への反論の特集を組んでいる。まずノン・フィクション作家であるバーバラ・エーレンリックは「男だって戦争は好きじゃない」と銘打った反論の中で、「戦争は酒場のけんかを大規模にしたものではなく」「個人の衝動では説明できない複雑かつ高度に組織化された集合的行動である」と述べている。そして、男性の戦争への意欲は、フクヤマが思っているほど強くはなく、だから兵士たちは、儀式やいじめなどのさまざまな方法により「動物」になることを強要されなくてはならないのである。また西洋史を振り返ると、兵役を逃れるために、手足を切断するなど、自殺行為に近いことをしてきた男性の例が幾多となくある、という。さらにエーレンリックは、最近のロシアにおける古代埋葬地の発掘調査結果が、紀元前2000年頃すでに女性兵士が存在していたことを示していたことに言及し、戦争と暴力行為は、男性の専売特許ではないと述べている。また18世紀および19世紀における暴動や革命において女性達が指導的役割をはたしたことや、第二次世界大戦中、ソ連軍が女性を戦闘機のパイロットあるいは、地上戦の兵士としてつかったことは、女性が集団的暴力のための能力をもっていることを十分に示しているのだ、ともいっている。エーレンリックはさらに続けて、フクヤマが、オロフ・パルメ、ヴィリー・ブランツ、マーチン・ルーサー・キング、モハンダス・K・ガンディらを完全に無視している点を指摘し、事実認識の甘さを批判している。

エーレンリックにつづいて『ネーション』誌の編集者カーサ・ポリットは「パパは何でも知っている」の中で、女性が暴力的でないというのは誤りであるとしている。ポリットは、女性が嬰兒殺しや、幼児虐待、女子割礼をしたりしていること、あるいは娘や義理の娘、メイドなどを虐待していること、またバイキングの妻たちが、喜んで海外で略奪する夫たちを送り出していたこと、近世のヨーロッパにおける魔女狩りに女性たちが荷担していたことなどをあげ、歴史上の暴力行為は多くの場合、女性の完全なる協力を得てなされたことを指摘し、女性もまた暴力とは無縁でない、と主張している。ポリットによれば、女性の平和主義的傾向は、ごく最近の現象なのである。さらにフクヤマ論文が前提とする、戦争は個人による暴力を拡大したもの、という考え方は誤りで、戦争は、政治的指導者により組織されたものなのであるとしている。そして、もし男性がフクヤマのいうように好戦的なのであれば、なぜ徴兵制が存在するのか、と反語的問いを投げかけている。

男性は、フクヤマのいうとおり、女性より暴力的なのか。それとも女性も男性と同じくらい暴力的なのか。フクヤマの論文が火をつけた論争は、以上みてきたように男女間の暴力性の違いをめぐる議論に発展した。

ところが、この論争をながめていたあるフェミニストがここで「待った」をかけた。このフェミニストこそが現代のフェミニスト的視点による国際関係論を形づくった先駆的研究者のひとり、J・アン・ティックナーである。ティックナーは言う。

女性による政治支配のメリットや不都合について仮説をたてたり、あるいは男性と女性の攻撃性の違いについて議論するのは、世界中の女性が直面する様々な抑圧の現実から目をそらすものである。

すなわち、ティックナーによれば、ジェンダーに関する重要な課題は、「男性は好戦的か、女性は平和的か」という議論ではなく、全世界的に女性たちが各国の社会的あるいは文化的要因により、その地位をおとしめられているという現実を目をむけることなのである。たしかにフェミニスト研究者たちは、オーソドックスな国際関係の専門家と同じく、戦争と平和の問題に深い関心を払ってきた。しかし彼ら・彼女らの功績は、性と好戦性の関係を明らかにしたことでなく、今まで国際関係の研究者たちが見過ごしてきた、戦争と平和にかかわる重要な問題—戦時におけるレイプ、基地周辺における買春、難民、文民の殺戮などを国際関係論の重要課題として取り上げてきたことにある。

このような新しい国際関係論の試みとして代表的な著作二点があげられる。まず第一は、1989年に初版が発行されたシンシア・エンローによる「バナナとビーチと基地」である。エンローは、その著作の第一の目的は、女性が国際関係にどう位置づけられるのかを考えることであるとし、同盟や外交といった国際関係論ではなじみのある問題、およびファッションや食べ物、メイドといった従来型の国際関係論では登場しない問題をそれぞれとりあげ、それらの問題領域で女性がどういう役割を果たしているかを論じている。

例えば、外交について書かれた第5章において、エンローは、こう述べている。

結婚は外交政策をつくる人々にとって深刻な問題である。それは、国際システムの中で、自国の利益を追求する政府の役人たちを悩ませる国王や女王についてだけでなく、庶民である外交官や入植者、貿易商や兵士たちについても同様である。彼らは、結婚すべきか。もしすべきなら、誰とすべきか。どのような結婚であるべきか。これらの問題は、政府にとって重要な関心事である。植民地および軍隊の基地に関する政策は、（結婚に関する）抜け目ない計算に左右されてきた。

もちろん、女性を国際関係における重要問題として表舞台に登場させる結婚が、深刻な

問題だからといって、女性が男生と同じように外交の部隊で活躍してきたわけではない。男性が外交官として、あるいは貿易商として、国家の国際的地位維持に不可欠な主体として活躍してきたのに対し、女性は、エリザベス一世やカトリーヌ・ド・メディシスなどの例外を除き、主に外交官あるいは貿易商、または入植者の妻として外交に「関わってきた」のである。しかし重要なポイントは、この「関わってきた」というところで、エンローによれば、女性は外交の舞台において単なるお飾りだったわけではないのである。たとえば、政府の代表間の最も重要な話し合いは、外交担当者どうしが信頼関係を醸成してはじめて可能なのであり、信頼関係の醸成は、大使公邸や下位の外交官の私宅においてなされる。そして、信頼関係醸成のための条件づくりに欠かせない黒子^{くろこ}として、またはホステスとして活躍するのが外交官の妻たちなのである。だから、外交官にとっては、どのような女性と結婚するかは、仕事が成功するか失敗するかを決定するといつていいほど重要な問題なのである。

次にエンローに続く著作として注目されるべきは、1977年に出版されたキャサリン・ムーンによる「同盟間のセックス」である。第二次世界大戦後発達した国際関係論が、主に国家間関係のみに注目してきたことに対する批判として、1970年代に、ロバート・コヘインとジョセフ・ナイは、国際関係をよりよく理解するためには、「非国家的主体」が注目されなくてはならないと主張した。しかし、ムーンによれば、彼らにより、国際関係論に脱国家的政治の概念が導入されたにもかかわらず、今日に至るまで国際関係論で扱われる主体は、従来どおりの「国家」に加え、多国籍企業、赤十字社あるいはアムネスティー・インターナショナルのような大規模なNGOばかりである。ムーンは、この結果、資金も政治力もない女性たちが、国際関係論ではまったく見えてこない、と指摘している。こういった批判に基づき、ムーンは、大韓民国における米軍基地周辺において買春をする女性たちの研究を、数多くの聞き取り調査をもとに行い、資金も政治力も無い女性であっても国家間の取り決めと深い関係があることを鮮やかに示したのである。

ムーンによれば、1969年、ニクソン大統領により発表された「ニクソン・ドクトリン」は、アメリカ政府によるアジアへの軍事介入縮小を方向づけたが、組織として大韓民国にひきつづき滞在し続けたいと願う米軍と、安全保障を米軍に依存する大韓民国政府は、これを不服とした。なんとか米軍の滞在をいままでどおり続けたいという両者の思いが一致して生まれたのが、1971年から1976年にかけて、大韓民国政府ならびに在韓米軍の協力のもとに実施された「基地周辺浄化作戦」(Clean-Up Campaign)である。この「作戦」は、そのころ基地周辺でひんぱんに起こっていた暴行事件の主な原因である人種的偏見の緩和や、大規模な性病予防のための施策を中心とするものであった。特に後者が実施された結果、この作戦は、基地周辺で買春をしていた女性たちをすべて巻き込むことになった。この例から、ムーンは、一見エリートのみしか関わっていないように見える国家間関係であるが、一般的にはプライベートなこととされる女性の身体やセクシュアリティが、国家の安全保障維持に深く関わっていることをあぶり出したのである。

しかしこのような先行研究があるといっても、このようなフェミニストによる国際関係分析は、はじめられてからまだ十数年しかたっており、研究の蓄積はまだ浅い。しかもフェミニスト国際関係研究者は日本国内にはほとんどいないことから、日本をめぐる国際関係の分析は、依然として日本の安全保障や日米関係、あるいは日本と国際組織の関係などに限られ、取り上げられるイシュー（論点）に斬新なものは余り見られない。しかしフェミニスト的視点による国際関係分析を必要とするイシューが、日本をめぐる国際関係にないわけではない。例えば、昨年の沖縄県北谷町でおこったレイプ事件を憂えて、あるいはムーンの研究に触発されて、国際関係研究者がフェミニスト的視点から日本の国際関係をとりあげるとするならば、恐らくまず最初に注目するのは、在日米軍基地の周辺における性暴力と買春の問題であろう。しかしこの問題を国際関係論の枠組みで系統的にとらえた研究は、まだ存在しない。ゆえにここでは、沖縄における米軍基地の問題をエンローあるいはムーン的視点でとらえるとどのように分析できるか、考えてみようと思う。

昨年6月29日午前2時過ぎ、沖縄県北谷町美浜の駐車場でおこった米兵による日本人女性のレイプ事件は、ともすればローカルなニュースで終わってしまいがちであった。少なくとも全国紙による当初の取り上げかたは、朝日新聞が29日付け夕刊一面に取り上げた以外は、どの新聞も後方のページに20数行程度の扱いであり、消極的であった。しかし、容疑者の引き渡しが遅れたことに対し、沖縄県民が激しい怒りをあらわすと、メディアの捕らえかたも積極的になり、7月7日には、全国紙すべてが、容疑者の身柄引き渡しについて一面で大々的に報じている。

そもそもこの事件がなぜこのように大きな波紋を広げたのかというと、これと類似した米兵による女子暴行事件が1995年9月に起きており、日米地位協定に基づき米国側が容疑者の身柄引き渡しを拒否したことに沖縄県民が強く反発し、その結果同協定の運用を改善し「殺人、婦女暴行は起訴前に引き渡し可能」とする合意が日米両政府間でかわされたことによる。ゆえに、今回の事件に関しては、こういった合意があるのに、なぜ容疑者の身柄引き渡しスムーズになされないのかというフラストレーションが、地元の強烈な反応を呼び起こした、と考えられる。

しかし、より根本的な問題は、日米地位協定の運用改善云々ではない。1995年におこった沖縄駐留の米兵による少女の暴行事件が、その後、基地移転問題へと発展したことにあるように、本来女性の身体と尊厳に対する大きな人権侵害の問題であったものが、なぜ基地移転の問題にすりかわったのか。なぜ本来「日本の」安全を保障する日米安保の枠組みでは、1995年と今回の暴行事件が象徴しているように、日本国民である沖縄県民の安全が守られないのか。これらの問題こそが基地における暴行事件の本質ではなからうか。この問題の規模を考えると、ごく部分的問題解明にしかならないとは思いますが、ここでは特に1995年の事件に注目し、なぜ女子暴行事件が、基地移転問題にすり替わったかという問題に対し、いくつかの仮説を立てて考えてみたい。

まず第一に、メディアがある事件を報道する際、そのニュースが国民に届く前に、事件が全国的に重要なものなのか、それとも特定地域においてのみ注目される問題なのか、といった事件の「ローカル性」の度合を決定してしまう、という問題が考えられる。沖縄では、基地周辺で女性暴行の事件が頻繁に起きている。しかしそれは、1995年の事件および北谷事件が起こるまで少なくとも全国紙では一基地に隣接してすまなければならない人々が日常直面している恐怖の問題として、特にその中で女性が犠牲になっているということに注目してとりあげられてはこなかった。この理由の一つとして、女性の人権問題は、とくに沖縄の女性の問題は、「ローカル性」の高い問題としてメディアがとらえがちだからなのではないかと考えられる。そして商業ベースのメディア - とくに全国紙などの全国規模のメディア（以降「全国メディア」と称する） - は、あるイシューのローカル性の度合が高いと判断した場合、そのイシューを深く掘り下げてとりあげないのではないかと考えられる。

しかしあるイシューのローカル性が高いかどうか、というのは、いったい何が根拠になるのかははっきりしない。沖縄では復帰後 4700 件あまりの米軍軍人による事故、犯罪が記録されており、その中でも最も多いケースとして女性への暴力が挙げられている。このような状況では、女性や子供が暗い夜道や繁華街を身に危険を感じずに歩くことは難しい。このように沖縄県以外では考えられないような不安が基地周辺地域に常にあるということは、日本社会全体の関心を引き起こすべき規模の問題である。にもかかわらず、沖縄の基地周辺で日々起こる米兵による暴力事件は、たいていの場合、「ローカル」なニュースとして処理されてきた。

第二の仮説として、沖縄県民以外の日本国民の意識の問題があるのではないかとということが考えられる。沖縄の基地問題が、なぜ全国的な問題に発展しないのかということの根底には、県外の間人は、沖縄あるいは沖縄の人々をエドワード・サイードのいう自分たちとは違う「他者」と認識することにより、沖縄の女性に対する人権侵害を、日本国民全体の問題としてとらえていないことがあるのではないだろうか。このような読者が多数をしめた場合、第一の仮説で示したように全国メディアが、基地周辺で起こる暴行事件を（全国の子どもを持つ親を震撼させた池田小の場合などと違い）ローカルな問題として処理し、あまり全国的に報道したとしても不思議はない。

そして以上の仮説は、国家レベルの政策決定過程に関する第三の仮説とも関連している。すなわち、全国メディアの消極性および沖縄県民以外の国民が、基地に関して沖縄県民の直面する問題、特に沖縄の女性の人権問題を自分たちの問題として捕らえていないことから、沖縄から選出されている議員以外の政治家たちは、沖縄における人権侵害の問題を直接とりあげる動機をもたない。したがって、国家レベルでは、沖縄の問題は、より普遍性のある基地移転の問題として、あるいは日米安保のあり方の問題として議論されるようになるのである。だから、女性の人権の問題である基地周辺における暴行事件の解決策として、その本質的解決には結びつかないであろう（沖縄県内での）基地移転の問題が議論されたりするのではないだろうか。

自然科学の分野でも社会科学の分野でも、女性と男性がどう違うのか（あるいは違うないのか）、という問題には結論がでていない。しかし、エンローやムーンなどの研究や沖縄の基地問題を考えるとき、女性と男性では国際関係に対する影響力、あるいは国際関係から与えられる影響に大きな違いがあることに気がつくだろう。そして国際関係に対する男性と女性の関わりあい方の違いに注目すると、国際関係が決して抽象的な現象ではなく、むしろ私たちの日常と深く結びついているという事実がだんだんと見えてくるはずだ。

NHK 朝の連続テレビ小説「ちゅらさん」が、不況の続く暗い日本に一抹の明るさをもたらし、好評のうちに終わった。「ちゅらさん」のおかげで沖縄はちょっとしたブームになっているらしい。結構なことである。これを機会に沖縄と米軍基地の問題、さらには日米関係を含めた国際関係をより身近なこととしてより深く考えられるようになると幸いである。

参考文献

大島 清『男の脳は「欠陥脳」だった』新講社、1999 年。

アラン・ピース、バーバラ・ピース『話を聞かない男、地図が読めない女』主婦の友社、2000 年。

Ehrenreich, Barbara, "Men hate war too," *Foreign Affairs*, Vol. 78, No. 1, January/February 1999.

Enloe, Cynthia, *Bananas, Beaches and Bases: Making Feminist Sense of International Politics*, Los Angeles: University of California Press, 1989, 2000 (updated edition).

Ferguson, Brian, "Perilous positions," *Foreign Affairs*, Vol. 78, No. 1, January/February 1999.

Fukuyama, Francis, "Women and the evolution of world politics," *Foreign Affairs*, Vol. 77, No.5, September/October 1998.

Keohane, Robert O. and Joseph S. Nye, *Power and Interdependence : World Politics in Transition*, Boston: Little Brown and Co., 1977.

Moon, Katharine H.S., *Sex Among Allies: Military Prostitution in U.S.-Korea Relations*, New York: Columbia University Press, 1997.

Pollitt, Katha, "Father knows best," *Foreign Affairs*, Vol. 78, No. 1, January/February 1999.

Tickner, J. Ann, "Why women can't run the world: International politics according to Francis Fukuyama," *International Studies Review*, Vol. 1, Issue 3, Fall 1999.

Tiger, Lionel, "Prehistory returns," *Foreign Affairs*, Vol. 78, No. 1, January/February 1999.

次の問題(1-41)には、それぞれa, b, c, dの答えが与えてあります。各問題につき、a, b, c, dのなかから、最も適当と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたるa, b, c, dのいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

1. 『話を聞かない男、地図が読めない女』の著者は、男性は地図を読むことが得意であると主張するが、空間にまつわる多様な情報を地図に書き記す知的技術は、人類が常に持っていたものではなく、地図の発達には、さまざまな要因が考えられる。次のうちで地図の発達にもっとも関係が少ないと思われる要因はどれか。
 - a. 交易の発達
 - b. 航海技術の発達
 - c. 哲学の発達
 - d. 天文学の発達

2. なぜ、ゴルフ、コンピューターゲーム、フットボールなどが現代の「狩り」なのか。
 - a. これらがすべて、勝敗を決定するものだから。
 - b. これらがすべて、獲物を追いかけるものだから。
 - c. これらがすべて、運動神経を必要とするものだから。
 - d. これらがすべて、空間能力を必要とするものだから。

3. ジェンダーということばの意味は、
 - a. 社会・文化がつくりあげた男性と女性の違いのこと。
 - b. フランス語などの女性名詞、男性名詞のこと。
 - c. オス・メスといった男女の違いの新しい名称のこと。
 - d. 生殖器や脳の構造など、生物学上の男性と女性の違いのこと。

4. 男女の脳の構造について述べてある個所は、
 - a. 大脳新皮質が優位にあると人間は暴力的になる、とっている。
 - b. 大脳新皮質が優位にあるから男性は女性よりすぐれている、とっている。
 - c. 男性の右脳は女性のそれにくらべ発達していない、とっている。
 - d. 右脳の発達した女性はすぐれた芸術性をもつ、とっている。

5. 19世紀の帝国主義の時代には、帝国主義的支配を正当化するために進化論が援用された。同様に生物学的決定論が政治的に喧伝されたのは、次のどの時代か。
- a. 大革命期のフランス
 - b. 大航海時代のスペイン
 - c. ナチス支配期のドイツ
 - d. 独立戦争期のアメリカ
6. アメリカで婦人参選権が憲法で認められたのは、1920年のことであった。次のうち、これ以後におこった出来事はどれか。
- a. 世界経済恐慌
 - b. 中華民国成立
 - c. 第一次世界大戦
 - d. ロシア革命
7. 日本で婦人参選権が実現する直接の契機となったのは、次のどのできごとか。
- a. GHQの指令
 - b. 自由民権運動
 - c. 普選運動
 - d. 文明開化
8. フクヤマの主張に最も近いのは以下のどれか。
- a. 平和を好む女性が、政治を支配することは、よいことだ。
 - b. 女性が政治を支配すると、暴力的な独裁者に支配される国に負けてしまう。
 - c. 男性はチンパンジーと同じだから、政治をまかすわけにはいかない。
 - d. 世界政治において指導力を発揮してきたのは、常に男性政治家たちだった。
9. 国際法の父といわれるのは、次のどれか。
- a. 『永久平和のために』を著したカント
 - b. 『自由海洋論』を著したグロティウス
 - c. 『国家論』を著したボダン
 - d. 『統治二論』を著したロック

10. マーガレット・サッチャーとは、次のどれか。
- a. イギリス初の女性首相で労働党出身
 - b. アメリカ合衆国初の女性国務長官
 - c. イギリス初の女性首相で保守党出身
 - d.ブレア内閣におけるイギリス初の女性官房長官
11. 本文において「モブツ」、「ミロシェビッチ」、「サダム」とは独裁者の別名として扱われているが、実際のミロシェビッチとは、
- a. ポーランドの政治家。自主管理労働組合「連帯」をつくり、反体制のシンボルとなる。
 - b. 新ユーゴの前大統領。新ユーゴでは強権体制をしき、コソヴォにおける内戦を激化させた。
 - c. イタリアの独裁者。反社会主義運動に参加、ファシスト党をおこし、第2次世界大戦に参戦。
 - d. ソ連の独裁者。一国社会主義を主張し、独ソ不可侵条約を締結。
12. 大量破壊兵器の典型的なものは、核兵器だが、冷戦時代に米ソ間にあった核兵器による相互抑止のことを
- a. 恐怖の均衡という。
 - b. 死の均衡という。
 - c. バランス・オブ・パワーという。
 - d. デタントという。
13. フクヤマの政策提言には論理の飛躍があるが、それは、
- a. 男性の攻撃性が先天的なものとしているにもかかわらず、女性の政治参加が男性の攻撃性を奪う、としているから。
 - b. 男性の攻撃性が先天的なものとしているにもかかわらず、将来の独裁者たちは女性的な平和主義を好む、としているから。
 - c. 男性の攻撃性が先天的なものとしているにもかかわらず、ジェンダーフリーな教育は、男性から「おとこらしさ」を奪うとしているから。
 - d. 男性の攻撃性が先天的なものとしているにもかかわらず、男女混合部隊では男性の士気がさがる、としているから。

14. 次の文章を読んで以下の問いに答えなさい。

「ミリタリズムは、暴力を国家目的のための手段として、全面的に適用することを強制するが、この暴力行使の強制はちかごろ、暴力行使そのものとおなじくらいに、もしくはより以上に強く、非難されるにいたっている。このような強制としてあらわれる暴力は、自然目的のために単純に適用される折りとは、まったく別の機能をおびており、法的目的のための手段として適用されるのだ。」ヴァルター・ベンヤミン（野村修訳）『暴力批判論』より。ここでいう「この暴力行使の強制」ともっとも関係の深い法はどれか。

- a. 治安警察法
- b. 徴兵令
- c. 国家総動員法
- d. 保安条例

15. 「兵役をのがれるために手足を切断」した男性がいたことは、

- a. 先天的攻撃性ゆえに、自分を傷つける行為をする男性がいることを示している。
- b. 歴史上、兵役をのがれるためには、自殺行為が必要条件だったことを示している。
- c. 先天的攻撃性ゆえに、喜んで兵役につく男性ばかりでないことを示している。
- d. 精神的な問題から兵役免除になった例があることを示している。

16. 徴兵制の展開を考えると、もっとも重要な契機となったのは次のどの出来事か。

- a. ナポレオン戦争
- b. バラ戦争
- c. 30年戦争
- d. アヘン戦争

17. エーレンリックがモハンダス・K・ガンディに言及している理由は以下のどれか。

- a. 狂信的ヒンドゥー教徒に暗殺されるほど、軟弱だったから。
- b. 反英独立運動の闘士だから。
- c. 非暴力・不服従を唱えた平和主義者だったから。
- d. 反核運動をおこし、世界に平和主義を広めたから。

18. 資料のなかで、エーレンリックは 18 世紀および 19 世紀における暴動や革命において女性たちが指導的役割をはたしていたことをフクヤマに対する反論の根拠としている。女性が主導的にかかわったと考えられる出来事は次のどれか。
- 清朝末期の変法運動
 - イギリス支配に対するインド大反乱（セポイの乱）
 - 明治維新における鳥羽・伏見の戦い
 - フランス革命におけるヴェルサイユ行進
19. マルチン・ルーサー・キングは、
- 16 世紀カルヴィンとともに旧来のカトリック教会の教義を否定、宗教改革を行った。
 - 「私には夢がある」というスピーチをした、1960 年代アメリカにおける公民権運動リーダー。
 - 「アメリカがあなたたちに何をしてくれるのかではなく、あなたたちがアメリカのために何ができるか問い給え」というスピーチで有名なアメリカの政治家。
 - 奴隷制に反対し、南北戦争後、奴隷解放宣言を発布したアメリカの大統領。
20. ポリットによれば、女性が「嬰兒殺しや、幼児虐待、女子割礼」を行うのはなぜか。
- フクヤマの主張に反して、人間の女性は、男性とおなじく暴力的であるから。
 - 社会の風習やしきたりにさからえず、やむをえないから。
 - 子育て中の女性は疲れきっていて、子どもを愛することができないから。
 - 途上国では、避妊の知識が普及していないので、望まぬ妊娠をする人が多いから。
21. 日露戦争のとき、反戦的と非難された詩をうたった女性は、次のどれか。
- 与謝野晶子
 - 平塚らいてう
 - 樋口一葉
 - 岡本かの子
22. ヨーロッパにおいて魔女狩りが猛威を古い、多くの女性や男性が告発され処刑されたのは 16 世紀後半から 17 世紀初頭であった。魔女狩り現象と関係がないと思われるのは、次のどのできごとか。
- 十字軍が引き起こした異教徒への警戒
 - 宗教改革が引き起こした社会的不安
 - 新大陸発見以後の価格変動と経済危機
 - 裁判制度など近代的国家機構の整備

23. 日本において非戦論を唱えた男性は、次のどれか。
- a. 吉野作造
 - b. 中江兆民
 - c. 福沢諭吉
 - d. 内村鑑三
24. エーレンリックとポリットの戦争に関する考え方に最も近いのはいずれか。
- a. 戦争は、個人の心の中に生まれる。
 - b. 17世紀以降ヨーロッパに生まれた国家間システムこそが、国家間の戦争の原因だ。
 - c. 戦争は、ヒトラーのような過剰な攻撃性をそなえた独裁者により引き起こされる。
 - d. 戦争は、国家により組織された暴力である。
25. ティックナー、エンローおよびムーンに触れた箇所から、「オーソドックスな国際関係の専門家」あるいは「従来型の国際関係論」が扱ってこなかったと考えられる問題は、以下のうちどれか。
- a. なぜソ連邦が崩壊し、冷戦構造がなくなった現在でも、大国間の軍拡競争の恐れがなくなるのか。
 - b. なぜ貿易がグローバル化された今日でも、セーフガードの発動といった、保守主義台頭の傾向がみられるのか。
 - c. アムネスティ・インターナショナルや赤十字社が、国際機関における意思決定にどのような影響力をもっているのか。
 - d. なぜ世界各国でドメスティック・ワーカー（家事労働者）としてはたらく人には第三世界の女性が多いのか。
26. エンローによれば、「結婚」は重要な問題である。なぜなら、
- a. 歴史的に見て国王の結婚は、常に政治的戦略をともなっていたから。
 - b. 外交には華やかな社交がつきもので、妻の存在無しには社交が困難だから。
 - c. 誰と結婚するかにより、外交の必要条件である信頼醸成の可否が決まるから。
 - d. 結婚していない男性は半人前とみなされ、外交の舞台では軽んじられるから。
27. エリザベス1世期のイギリスと関係のないものは次のどれか。
- a. シェークスピア
 - b. 東インド会社
 - c. 無敵艦隊
 - d. 選拳法改正

28. カトリーヌ・ド・メディシスはメディチ家からフランス王家に嫁いだ女性であるが、
メディチ家についてもっともふさわしい説明はどれか。

- a. スイス出身の貴族で、神聖ローマ皇帝位に代々ついた名家。
- b. 学芸の保護者として名高いフィレンツェ出身の銀行家。
- c. ロレーヌ出身の貴族で、スコットランド王家とも縁組みした名家。
- d. ミラノー帯を支配し、フランス王家とも姻戚関係にある公爵家。

29. 以下のうち「非国家的主体」でないのはどれか。

- a. ソニー株式会社
- b. 自由民主党
- c. 国際基督教大学
- d. 日本政府

30. NGO とは

- a. 非政府間組織のこと。
- b. グローバルに活躍するメディアグループのこと。
- c. 世界の政府があつまってつくる組織のことで、代表的なものは国際連合。
- d. 人道的活動をするグループのみをさす。

31. 大韓民国に米軍が恒常的に駐留しはじめたのは、1955 年以降であるが、それはアジア
で起こった大きな戦争を契機としている。その戦争は、

- a. ヴェトナム戦争である。
- b. 第 2 次世界大戦である。
- c. 韓国併合である。
- d. 朝鮮戦争である。

32. 本文中「買春」という言葉が使用されている理由は何か。

- a. 「売春」の植字ミス。
- b. 性サービスを売る女性に対し差別的な言葉をさけ、「買う」側の責任を明らかにするため。
- c. どちらでもかわらないから、交互につかってよく、今回はたまたま「買」の字がつかわれたため。
- d. ムーンは、ポストモダンの研究をしているので、勝手に造語を作るのが得意だから。

33. 「ニクソン・ドクトリン」というのが本文中にでてくるが、「ニクソン・ショック」とは何か。
- a. 1973年、第4次中東戦争を契機とした石油生産国による石油価格の大幅値上げ。
 - b. 1972年、ニクソン大統領の訪中の際に発表された米中共同声明のこと。
 - c. 1971年、金とドルの交換停止をきめたアメリカの政策。ドル・ショックともいう。
 - d. 1974年、ニクソン大統領を辞任に追い込んだ事件。ウォーターゲート事件ともいう。
34. ニクソン・ドクトリンにもとづき、アメリカがとった政策は以下のどれか。
- a. ヴェトナムからの米軍撤退
 - b. 多国籍軍を組織し、イラクを攻撃
 - c. 東西ドイツ統一の支援
 - d. NATOの創設
35. 次の文章を読んで以下の問いに答えなさい。「事実」に即してみれば、「日本」や「日本人」が問題になりうるのは、列島西部、現在の近畿から北九州にいたる地域を基盤に列島に確立されつつあった本格的な国家が、国号を「日本」定めめた七世紀末以降のことである。それ以後、日本ははじめて歴史的な実在になるのであり、それ以前には「日本」も「日本人」も、存在していないのである。」網野善彦『日本社会の歴史』より「日本」という国号が使われるようになった頃、沖縄を含む東アジア海域を航行したのは、
- a. 遣唐使
 - b. 倭寇
 - c. 南蛮船
 - d. 御朱印船
36. 著者は北谷町でおこったレイプ事件をフェミニスト的国際関係分析の材料として取り上げているが、その理由は、
- a. レイプの問題は、常に男性と女性のあいだにある抑圧・服従の関係と結びついており、権力の作用する問題は政治問題だから。
 - b. 米兵が日本人女性をレイプしたのは、日本国民にとって屈辱的である。このような問題を生む帝国主義的アメリカが許せないから。
 - c. 米兵によるレイプという問題が、日米安保に基づいて沖縄に米軍が駐留していることと深い関係があるから。
 - d. 著者が、沖縄県出身でこの問題には深い個人的興味があるから。

37. 日米地位協定は、日本の外交政策の基軸となる、ある「重要な条約」に基づいて、米軍の日本駐留にともなう施設、裁判管轄権等に関し細かく規定したもののだが、ここにいう「重要な条約」とは、
- a. 日米平和条約のことをいう。
 - b. ポツダム宣言のことをいう。
 - c. 日米安全保障条約のことをいう。
 - d. サンフランシスコ平和条約のことをいう。
38. 沖縄に日本全体の米軍基地の75%が集中しているのは、沖縄の歴史と無縁でないが、沖縄が日本に返還されたのは何年か。
- a. 1972年
 - b. 1962年
 - c. 1952年
 - d. 1982年
39. 近世の沖縄について書かれた次の文章のうち、正しくないのはどれか。
- a. 琉球は小藩であったため、島津氏に搾取されていた。
 - b. 琉球は、薩摩藩に侵略され服属を強いられた。
 - c. 琉球は、中国と朝貢関係を維持していた。
 - d. 琉球は、江戸に使節を送っていた。
40. 沖縄の歴史について書かれた次の文章のうち、正しいのはどれか。
- a. 琉球の帰属をめぐって日本と朝鮮の間に武力衝突がおこった。
 - b. 明治政府は沖縄県に開拓使をおいて、その発展につとめた。
 - c. 明治政府は軍隊と警察をおくって廃藩置県を強行し、沖縄県が生まれた。
 - d. 西郷隆盛は、琉球への軍隊派遣を強く主張したが聞き入れられなかった。
41. なぜ著者は基地移転が暴行事件の解決策とはならない、と考えているのか。
- a. 基地を移転しても、基地周辺における暴行事件はなくなるから。
 - b. 基地移転は、受入地域の抵抗が予想され、実現不可能だから。
 - c. レイプや買春は「必要悪」であり、どのような世の中にも存在するから。
 - d. 基地が本土に移転されることで問題はもっと深刻になることが予想されるから。